

スタッフエッセイ 11 NO151(2006.12.5) ~ 165(2007. 02.07)

151	クリスマスとサンタさん	亀貝一義	2006.12.05
152	高校1年生と新米担任の12月	畑中紀世彦	2006.12.07
153	「死」	杉野建史	2006.12.12
154	「進路」	杉野建史	2006.12.15
155	巣立ち	田房絢子	2006.12.20
156	靴	芳賀 慈	2006.12.23
157	新しい年を迎えるに当たって	亀貝一義	2006.12.28
158	ブル部第1回定期演奏会	芳賀 慈	2007.01.15
159	2007年の嬉しいスタート	畑中紀世彦	2007.01.16
160	ウラばなし	新藤 理	2007.01.17
161	ラヴ・レター	木村良太	2007.01.18
162	「あやっち」	田房絢子	2007.01.19
163	フリースクールの父母会	亀貝一義	2007.01.24
164	白い地図	芳賀 慈	2007.02.02
165	いつか、その日が来る時まで	木村良太	2007.02.07

151 クリスマスとサンタさん 亀貝一義 2006.12.05

まもなくクリスマス。私たちが子どものころ、いなかだったせいかこういうイベントはなかった。「もういくつ寝るとお正月...」で、楽しみはお正月だった。

クリスマスは、ご存じのようにキリスト教を生み出したイエスの誕生日といわれている（実際はイエスの誕生日がいつか全く分からないのだが）。だからキリスト教でもない私たちにとっては無関係であった（はず）。

うちの娘はまだ小学校にはいってもサンタクロースが実在すると思っていたらしい。子どもの夢は大切にしよう、などという思いもあって「いい子になっていたらサンタさんが...」などといっていたのだが、「これはサンタクロースからのプレゼントで、これはお父さんお母さんからのプレゼント」、そして数日後のお正月にはお年玉。これでは親の負担が大変だから、「サンタさんは本当はいない」と告げた。これはしかし小さい子どもの生きる力の一つで、サンタがいるとしていた方がプレゼントをダブってもらえるという思惑だったかも知れない。

10数年前、塾の生徒でお寺さんの息子がいて、「今日はクリスマス...」といていたので、仏教でクリスマスを祝うとはいいかげんな坊主だな、と思っていた。

しかし先日「劇団一揆」の芝居を見たら、「サンタクロースに類する話しは宗教や民族に関係なく世界各地にたくさんある」というセリフがあった。

クリスマスは、従って、キリスト教でも仏教でもなく、要するに「かわいい子どもにおとなが愛をこめてプレゼントをする日」と理解していた方が現実的だということ（この年になって）悟ったし

だいである。

152 高校1年生と新米担任の12月 畑中紀世彦 2006.12.07

4月から高1の担任を持って8ヶ月が経つが、日頃から不安に感じていたことがある。単位修得が危険信号の生徒（授業に出席しない生徒）が、いったいどういう思いで学園生活を送っているのかということだ。私は中学でも高校でも体育以外の学校の授業が楽しかった記憶はない。だからこそ「出席したい」と思わせる授業をつくりたいのだけれど、授業に出席しなければその願いも届かない。はて...どうしたものか、1年生も残り4ヶ月となって、行事が一段落したこの時期に落ち着いて話を聞いてみたかった。対象となる生徒とじっくり話す機会をつくろうと、Sぎ野主任に相談してみると、「その生徒だけじゃなくてクラス全員と個人面談しよう。うちのクラスもやるよ。」とすかさず示唆してくれた。そうだよなあ...、元気に毎日通ってる生徒だって不安もあるだろうし...、さすがSぎ野さん！こうして個人面談は始まった。

いざ個人面談を始めると、気がつかなかった生徒たちの思いを聞くことができた。もちろんそれぞれ話した内容は違うけれど、ほとんど全員に言ったことがある。以前学園長がおっしゃっていたことだが、私なりに伝えようと思った。

「将来何をしたいか、どんな職業が自分に合うのか今は分からないかもしれない、想像もつかないかもしれない。でも、少しでも先の将来なら考えられるだろう。1年先の自分を想像したとき、生活にしる、勉強にしる、不安を思うならば何か始めよう。もう目標があるならばなおさら始めなきゃ。どうしたいか、どうしたらよいかは分からなくても、どうすべきかは分かるはず。」

私が高1のときは、将来のことなんて考えていなかった。遠い先のことのように思っていた。意味も感じずにただ勉強していたあの頃、こうやって考えられていたなら、もっと勉強を『楽』に考えられたように思う。我が生徒たちに何か届いてくれたら嬉しい。

153 「死」 杉野建史 2006.12.12

人間は得体の知れないものに恐怖を感じる生き物であると思う。昔から科学的に証明がつかなかったり、万人が実際に見たり聞いたりできなかつたりするモノに遭遇すると、人間は祈る。時には神に命を乞う。その心は実は大切だったりする。

私は幼少の頃から“死”に対して異常なまでの恐怖感をもっている。寝るときによく「死んだらどうなるのか」を真剣に考えていた。一生懸命に想像した。結論が出るわけでもなく、想像できるわけでもなくいつの間にか眠ってしまった。しかし、幼いながらに想像した死後の世界を覚えているし、それを考えると今でも恐怖を覚える。「ヒトが死ぬと肉体は滅びる。しかし、魂は生きていた時と何ら変わりなく存在し続け意識もはっきりしている。魂の目や耳で生前と同様に情報を得ることができる。移動は生前よりも素早くでき空を飛べる。でも、自分の意志を伝えることができない。話しかけたり、触れたりして生きているヒトに自分の存在を解ってもらえない。そして、私の魂は死ぬことなく永遠に存在し続ける。自分の知人がすべて死んで知り合いがいなくなり、見慣れた風景がなくなり自分がどこにいるかも解らないようになってしまう。そのうち地球が消滅して私の魂の居場所がなくなって途方に暮れる...。」これが私の想像した死後の世界。矛盾だらけで、つじつまが合わない。解ることが絶対にできない“死”なんて怖いモノでよいのだ。一番怖いモノでよいのだ。一番怖いモノは自分から一番遠いところにあるべきだ。

死は自分から一番遠いところにおいておきなさい。

死ぬってとっても怖いんだぞ。

154 「進路」 杉野建史 2006.12.15

この時期、特に高等部の3年生は進路に頭を抱えている。自分にもこのような時期があったから「なにイジイジ考えているんだ。腹据えて取り組んでみる。」と格好つけて偉そうに大口をたたける自分が

いる。

自分の進路。「これから先の人生のコース選択」と考えると、18歳のガキ達（愛情込めてたまにこう呼んでいます）には荷が重すぎる。せめてどんな勉強がしたいとか、どんな資格を取りたいとか、卒業から20代の前半をどのように生活したいとかの展望を持つことができれば、「ほんの少し先の“将来”のコース選択」は生きるか死ぬかのような難しい選択ではなくなると思うのである。

私たちは事ある毎に「食わず嫌いをするな。何でも挑戦してみよう。たくさんの体験をしてみよう。」と口にしてきた。亀貝先生も3年生担任の田房氏も口が酸っぱくなるくらい、生徒に要求してきた。様々な体験は色々な場面に於いて貴重な判断材料になる。ということを経験しないと理解できないのだろう。と、思わない日はない…。しかし、自分の経験から学んだことを人生の後輩達に伝えることは必要だろうし、悪いことではないはずである。18歳のガキ達は学園を卒業する。この卒業は次のスタートラインに立つことに他ならない。無数に存在するどのスタート位置にガキ達は着こうとするのか。

違った考え方もある。なかなか決まらない進路をいつまでも考えるのではなく、「この辺りでよい」と割り切って、飛び込んだ進路で自分の興味あることや関心事を必死に探す方法である。この方法は決していい加減ではない。しかし、この様に次のスタート切ろうと割り切れる、考えを整理できる生徒は多くない。判断できずにグルグル堂々巡りになる。判断する時に参考にできる材料（様々な体験）が明らかに不足しているからである。私の反省点の1つ。

私は18歳の時の希望した進路に現在立っていない。もし、夢の夢としてその時の進路に何らかの方法で立つことができるのなら、立ってみたいと今でも思う。その当時の自分の努力に後悔がないと言えば嘘になる。でも今、私が立つ場所に誇りと少しの自信を持っている。

生徒達に言うように「少し先の未来を考える」ことを大切にしながら自分の進路を見つめている。

155 巢立ち 田房 絢子 2006.12.20

少しずつ3年生の進路も決まってきた、この札幌自由が丘学園を巣立つ準備に入りつつある。とても大きな決断をし、未来へ旅立とうとする彼らをととても頼もしく思う。

受験勉強、面接のための練習。それらを悩みながらもこなしていく毎日。どれほどの葛藤を心の内に秘めているのだろうか。もう進路が確定した生徒も、まわりの受験生の気を荒げないよう、逆立えないよう、静かなエールを送りながら、同じように葛藤し、毎日を過ごしている。ゆるやかに、しかしはっきりと、クラスは受験ムードに包まれていった。ただこれは否定的な変化ではなく、間違いなく彼らの未来への架け橋となる過程の一部である。負けそうになるときもあるかもしれないけど、どうか乗り切ってほしい。これまでの日々、支え続けてくれた家族、そして見違えるように変わった自分自身を信じて。

この札幌自由が丘学園を巣立つ日が、新たなスタートラインになりますように。

156 靴 芳賀 慈 2006.12.23

先日、朝日新聞で1960年ローマ五輪のマラソン勝者アベベ・ビキラを取り上げていた。裸足のランナーとして注目を集めた、時の人である。もちろん私は当時を知らないけれど（強調）小学生の時の阿部という同級生はみんなにあべべと呼ばれていたし、運動会の徒競走では裸足か足袋で走るのが普通だった。

どうして靴を履かないで走っていたのかというと、運動靴がなかったからに外ならない。新聞は、その昔日本代表選手がゴム底の足袋を履いて走っていたことも伝えている。運動会がどうして足袋だったのか、長年の謎が氷解した。

私は昔も今も足のサイズが大きく、ミュールやピンヒールなどとは全く縁がない。飲み会などで靴を脱ぐとき、私の靴だけ底の輪郭がしっかり見えるのを知られたくなくて、パンプスは履かない。

先のアベベは足の裏に肉球のようなものを持っていたという。いくら何でも五輪で裸足はと日本の

メーカーが靴をプレゼントすることを申し出た。東京五輪で良い宣伝になるとふんだら、当日違うメーカーの靴を履いて現れたそうである。

道が白くなり、また長い冬がやって来た。雪かきには長靴、通勤には防寒靴、休日はブーツと夏よりも外靴のバリエーションが広がる。が、私の靴選びは今年も来年もE E Eから始まる。

157 新しい年を迎えるに当たって 亀貝一義 2006.12.28

今年も終わります。その昔、昭和21年のお正月だったと思いますが、書初(かきぞめ、1月2日)に「平和日本の建設」とか「新生日本」といった文字を半紙に書きました。戦争が終わって間もないころ、誰もが「今年」ではなく「これからの日本」という未来への希望の気持ちを新たにしました。

貧しく、電気もなく、暖房も薪ストーブがひとつ、すきま風が吹き込むお正月に、子どもたちは未来への希望に心を躍らせました。その希望の最大のものは平和でした。

それから60年が過ぎました。2007年はどういう年になるのでしょうか。誰もが希望を持つことができる年になるのでしょうか。実際は逆かも知れません。格差拡大、社会不安、温暖化による言い知れぬ未来への不安、その他。

「今年こそいいことがあって欲しい」という願いを込めて、その昔(奈良時代)大伴家持がうたいました。「新しき年の初めの初春の 今日降る雪のいや重(し)け 吉事(よごと)」と。

要するに「今年こそ今降る雪が積もるように良いことが重なるような年であって欲しい」という意味です。これを最後に万葉集編纂の責任者であった彼は歌を詠まなくなったといいます。

そして、以降彼の人生は願いとは反対に、どんどん不幸が重なり、26年後自害することになります。「今年こそいいことが」と願うことは、今あまりいいことがないからなのでしょうね。戦後のお正月、願いではなく希望をまず語り合いました。

2007年、「願い」をいうのではなく共に希望を語ることで新年を迎えたいものです。

158 ブル部第1回定期演奏会 芳賀 慈 2007.01.15

とても良い演奏会だった。

賛助の方の力も大きかったが、それにも増して生徒たちの真摯な気持ちが伝わってくる演奏会だった。直前まで顧問が練習に来ない生徒にやきもきし、構成やプログラムの準備に追われ、彼らのモチベーションとコンディションが保たれるよう心配りしていたのを横から見ていたので、まずは大きな拍手で終わったことが何よりだった。

新しいことを始めたとき、最初は先週よりもできる自分、昨日よりも分かる自分が嬉しいものだけ、そのうち思うようにいかない大きな壁が現れるのは良くある話。一昨年末、ブル部はクリスマスミニミニコンサートと銘打ってレパートリー1曲だけの演奏会をした。当日の感想の大半は「こんなに短期間(3か月)でここまで演奏できるようになるなんてすごい」というものだった。それから季節がひと回りして、もう「こんなに短期間」は使えなくなった。

この間、部を去った生徒もいるし、なかなか体調が整わない声も聞いた。が、新入部員ももちろんいて、休日に自主練する姿もあった。定演当日の構成には、「発表会」ではなく会場を訪れた人をいかに楽しませるかという努力が見えた。演劇部員の司会や照明などの協力も大きな力だった。進化しつづける学園の部活。彼らの可能性は、まだほんのちょっと見えているだけである。

159 2007年の嬉しいスタート 畑中紀世彦 2007.01.16

今年最初のエッセイを書くのはやっぱりカフェRにて、新年の挨拶もかねてやって来た。マスターの第一声は「おっ！生きてた？(笑)」 そうか、久しぶりだな。そういえば、この店に初めて入ったのは昨シーズンの大雪の降るこんな季節だったと思い、いつものエスプレッソではなく初めて飲んだウイナーコーヒーを注文した。

さて、昨年の暮れになるが、我が学園では高等部にも保健用のベッドを設けようということになった。小さな学校の私たちには保健設備としてのベッドがフリースクール部の2階にしかなかったので、保健室的な場所が高等部にも必要だと、高等部唯一の女性スタッフであるBさんの近くにベッドを設けることになった。4階の住人はBさんと私の2人、ベッドを置くと具合の悪い生徒は私の顔を見て休むことになってしまう、...休まらないなあ。向きを反対にすると私の尻を見て休む、...それはもっとまずいか。「畑中さんが移動すれば？」あっけない結末、やむなく仲良しの(と私は思っているが)Bさんのもとを離れて、それまで過ごした4階を後にすることになった。はて...どこへ行こうか。

2005年春、私がフリースクール部の常勤スタッフになったとき、フリースクール部の2Fにデスクを置いた。翌年、担当が高等部が変わって私のクラスがある4階へ移動し、そして1年も経たずに今回の移動。結局引っ越しは3階へ、隣は恐れ多くも学園代表でさらにその隣には副代表だ。

実はこの場所、昨年高等部へ移ることになったときに机を置きたかった場所である。今年で御歳70歳となる学園代表、その下で少しでも長く、少しでも多く、イノキズムならぬカメガイズムを学びたいと思っていた。意気揚々と引っ越しをしていると、それを見たBさんが「そんなに私の隣を離れるのが嬉しいの？」と一言。そうです！私の2007年は、思いがけず嬉しいスタートを切ることになった。(Bさんの隣を離れるからではないですよ！)

デスクの場所が変わって心機一転、まず思うのは、正月返上で勉強にやってきた受験生をなんとか希望する大学に行かせること。頑張れ受験生！

160 ウラばなし 新藤 理 2007.01.17

プログラム中、一番短かった曲は自作の『ファンファーレ・ブラッシモ』。わずか11小節、演奏時間およそ40秒というごく短い曲だけど、楽譜を配ったのも一番最後だった。短いながらも集中力が要求される曲。「この曲をしっかりと吹けたら今日の練習は終了！」としめくくる日も多かった。

逆に一番長かった曲は2つの楽章を合わせて15分を超える『新世界より』。8月の合宿で楽譜を配ってから、演劇公演に向けての準備期間以外はコンスタントに練習を続けた曲だった。指導に来た方が「よくこんなの吹くなあ」とびっくりするような難所もちらほら。いつのまにか吹けるようになっていた、という日の不思議な驚きが忘れがたい。

いったいいくつ並んだのだろう。ステージ上をびっしりと埋めた打楽器の数々。その多くは賛助の方や(株)三響楽器さんが好意でお貸ししてくれたものだ。定演当日の朝は部員だけの力で会場まですべての楽器を運ぶ。打楽器パートの賛助の方々からは感激の声。「演奏前から体がポロポロ～」なんて言っていた部員もいたけど、がんばってよかったな。

キーボードを担当したR。プログラムには「賛助出演」と記されたが、元部員でもある。環境的に忙しくなり、担当していたホルンは続けられなかったが、今回は得意のキーボードで共演を果たした。帰り際、「大勢の仲間と演奏するなんてきっと最後だよな。参加できてよかった」と、珍しいほど素直につぶやいていた。

部長のKは、ステージ前に出てきてソロを吹き上げる大役を務めた。ただ一人の高校三年生でもある彼女。想いのこもったいいソロだった。これからは引退を迎える年に必ず前に出てソロを取るにしようか、と提案すると、嬉しいのか恐ろしいのか、二年生軍団が複雑な表情になった。

終演後、ほとんどの部員が涙を流していた。感動の涙だけではない。「音、出なかったー。悔しい」という泣き声も混じっていた。帰りのミーティングでは、「失敗もあったけどすごく楽しかった、また頑張ろうって思った」という部員たちの声。何とも未来につながる、いいしめくりだと思う。

お手伝いしていただいた演劇部・スタッフのみなさん。指導に来てくれた教育大・大谷短大の方々。生徒たちに新たな音楽の世界を見せてくれた賛助出演の方々。ご来場のお客さま。感謝の言葉はとも書き尽くせません。これからもどうか温かいご声援を！ありがとうございました。

161 ラヴ・レター 木村良太 2007.01.18

ついこの間、君が数日ぶりに僕の元に返ってきた。そして改めて分かったことがある。決して特別ではないこんな日に、いや、こんな日だからこそ、君にラヴ・レターを贈ろう。君は決して読むことができないのだけれど。

君と僕との今までを振り返ってみて、付き合いは短くないことを実感した。初めて会ったのは、あのスポーツ店。君は僕の目を引いた。僕は君に惹かれた。それからもう15、6年になる。時間が経つのは早いものだ。パートナーとして何十年も付き合っている人がいることだって知っている。できることなら、君ともそんな長い付き合いがしたい。できるだろうか？できないことはないんだよね、きっと。僕の気持ち次第なんだろう。

思えば、この間ずっと近くにいたのにもかかわらず、大切にしていられなかった。以前、「大切なパートナーなんだから、粗末にしちゃダメ！もっと大事にしなくちゃ」と級友に言われたことを思い出す。いずれ別れが来るのだから、その時その時を大切にしなくちゃいけない。分かっているつもりでも、時々、君に八つ当たりをしてしまう。君が僕に何もやり返してこないことをいいことに...

「大切な存在は、なくして初めて気がつくもの」では、遅いんだよね。たまに君は僕の側を離れていく。その時、僕は君の存在の大きさを実感する。君が大事なパートナーだって、最近ようやく分かった気がする。僕は君に会えて本当に良かったって思う。でも、君は僕に会って良かったんだろうか。違う相手の方が良かったんじゃないだろうか。君はこんなにも僕を支えてくれているのに、僕は君に何もしてあげられない。こんな無力な僕を君は許してくれるのだろうか。

君はイマドキのスタイルではないかもしれない。あれから15、6年も経っているのだから当たり前だよ。しかも、ちょっと重め。(笑)でも、そんな君がたまに愛おしいと思う。そして、そんな君が必要なんだ。ほかじゃ代わりにならない。君じゃなきゃダメなんだ。だから今年も、いや、まだまだこれから先もずっと僕の側にいて、僕を支えてくれないか。僕の右腕として。わが愛しのラケットよ！...ということで、みなさんも道具を大切に。

162 「あやっち」 田房絢子 2007.01.19

「あやっち！」そう笑顔で待ち合わせ場所に現れた彼女は、あの頃のままだった。

在学中は彼女のお世話役だった。というか、いつも彼女のためにご飯の支度をしていた気がする。私が年上なせいかな、彼女はととてもよく懐いてきた。「あやっち、あやっち」といつも呼ばれていた。そんな彼女は、高校を卒業してすぐに渡米している。右も左も言葉もわからないような所に、よくもまあ来たもんだなといった印象を受けたものだ。ただ、社会経験が浅いのか、様々なところで苦笑せざるを得ない場面が多かった。人懐こい性格も、裏目にでてしまうこともあった。

そんな彼女は、私よりも2年後に大学を卒業し、その後1年間、とある州の某自動車会社で通訳をしていたそうだ。今はもう23才。社会人として札幌で暮らしている。私の中の記憶では、甘えん坊の大学生でしかなかった彼女が、いつのまにか大人になって私の前に現れた。外の世界に触れ、いろいろな経験をしてきた彼女には、もうあの頃の頼りなさは消えていた。なんだか追い越されてしまったような虚しさ、もっと貪欲に挑戦すべきだった過去の日々に対する後悔の念、今の自分の誇らしさ、自分が通ってきた道の確かさ、いろいろな思いが駆けめぐった。

初めて出会ったとき、あやっちは23才だったんだ。だから私も早く23才になりたかったんだよ。もうすぐ24才になっちゃうけどね。」そういって彼女は人懐こい顔で笑った。

163 フリースクールの父母会 亀貝一義 2007.01.24

20日(土)の夜、学園のフリースクール部の父母会が行われた。10人足らずで少な目であったが、懇親会を兼ねていたこともあって率直な意見が出され、私も非常に教訓的であった。

いろいろな事情でフリースクールに来ることになった子どもたちの表情が、父母の目から見てどう変わってきたか、をそれぞれ気持ちをこめて語ってくれた。

フリースクールに通う子どもも、いわゆる不登校だけではない。だから親の対応もまちまちである

が、あえてまとめて言うなら次のようになるだろう。

子どもが他の子どもと同じように行動できないことがわかったならば（つまり一般の学校に通うことができないならば）「ハラをくくりました。死なないで欲しい。それだけでした」という母の声が胸につまった。

元気を取りもどす時を想定していろいろな情報を得るために親たちは努力した。フリースクールを訪問してそのスタッフと相談するののも一つだし、インターネット上のデーターを集めるのも努力の一つである。

そして子どもたちは自分の足で歩き始める。人との交わりに不得手であった人、学校生活でのいやな体験や先生との関わりによるマイナス体験、あるいはハンディキャップを持っていることからくるいくつかの弱点など、一人一人が異なる事情を持っているにせよ、やはりフリースクールに自分に「居場所」を見つけこのフリースクールを「自分の学校」として認知し出したとき、子どもたちはまったく生まれ変わったような成長の飛躍を遂げる。

そんなことを父母会に参加した親たちは、皆自分の言葉で自分の体験を、子どもの変わりように「感動」したことを上乘せして語った。そういう一人一人の気持ちを反芻しながら札幌自由が丘学園の存在意義をあらためて確認したのである。逆に「この学園がなかったなら…」という気持ちもまた大きい。

フリースクールの意義、役割などをあらためて考える。27日（土）の札幌自由が丘学園のイベントはさらにこのことを示唆するに違いない。

164 白い地図 芳賀 慈 2007.02.02

生徒たちが文集「白い地図」をつくり始めた。10人ちょっとで始まった今年のフリースクールも、あと数週間で年度の区切りを迎える。

先日見学に来たある母親に、「学校の定期試験はみんな受けているんですか」と訊かれ「一部の生徒は受けています」と答えると「じゃ、ほとんどの生徒はやる気がないんですね」と言われて驚いた。

試験もなく、評定に結びつくわけでもないのに、ここの生徒は理科の実験に全員集まり、数学の問題に頭をひねる。時には音楽の朝練習などをこなし、放課後は部活までやっている。やる気がないなんて、冗談じゃない。

でも今は、その活動も努力も中学校から発行される通信簿には表れない。年度末には、大抵1が行儀良く並ぶことになる。毎日通って、昨日よりも上手になったギターを、先月よりも多くなった笑顔を、何とか表現できないだろうか、学園では旅立ちの集いの日に通信簿に代わる個人評価票「夢」を発行している。

今年の旅立ちの集いは3月18日。卒業アルバムのような意味も持つ「白い地図」も、それまでには完成しているはずである。

165 いつか、その日が来る時まで 木村良太 2007.02.07

先月、札幌市内にある、小さな出版会社が倒産した。この知らせを受けた時、少なからずショックを受けた。自分自身、その会社に身を置いていたことがあるわけでもなく、特別に深いつながりがあったわけでもない。刊行していたのはブライダル情報誌であり、今の自分にとっては縁遠い内容のもの。当然、購読はしていなかった。

ただ、社長のK氏とは面識があった。何度かお会いし、ほんの少し話をした程度でしかないのだが、それでもなぜか私のことを気に入ってくれていたようだ。私の方では、その人となりを詳しくは知らないのだが、それでも、信念を持って自分の考えに正直に仕事をされていることはうかがい知ることが出来た。そんな氏に対し、密かに尊敬の念を抱いていた。

なぜこのようなことになったのか、よく分からない。資金繰りに苦しんでいたという話も聞かなかった。まさに青天の霹靂といった感じである。いろいろと想像はしてみるのだが、結局は直接聞いて

みないと分からない。だが、聞くことはしない。以前、氏のもとで働いていたという人たちも、本人の気持ちと性格のことを考え、あえて言葉は掛けず、そっと見守ることにしているという。私もその立場をとろうと思う。

氏はかつて、「やりたいことがあるんじゃないの?」と、人を介して私に言った。間もなく私は一つの岐路に立ち、考え悩むこととなった。それまでとは方向を変えて進むことに決めた、その一つの推進力はこの言葉にあった。そしてこの言葉は今でも頭の中で、心の中で時々こだまする。

氏にはこれから大変な日々が続くことと思う。これまでその道一筋でやって来たのだから、また機を見て、志をつないでいくのだろうとも思う。もちろん、そのような道を選ばない可能性もある。いずれにせよ、私に出来ることは、ただ見守ること。信じること。いつでも私の微力を使えるよう、心の準備をしておくこと。いつか、その日が来る時まで。